

## 第6章 there 構文

### ■be 動詞の意味

#### (1) be 動詞の二つの意味

be 動詞の用法には、「イコール」を表わす用法と「存在」を表わす用法の2つの用法があります。主語の後に be 動詞を置き、その後に場所を表す副詞語句を置くと、その be 動詞は「存在」の意味になります。そうでなければ「イコール」の意味になります。

#### ① イコールを表す文

01. **He is a famous singer.** (彼 = 有名な歌手) ⇒ (彼は有名な歌手です。)
02. **Our school is twenty years old.** (私たちの学校 = 20歳) ⇒ (私たちの学校は創立20年です。)
03. **That book is interesting.** (あの本 = 面白い) ⇒ (あの本は面白い。)
04. **This is an interesting book.** (これは = 面白い本) ⇒ (これは面白い本です。)
05. **Your pencil is sharp.** (あなたの鉛筆 = 尖っている) ⇒ (あなたの鉛筆は尖っています。)
06. **My mother is busy every day.** (私の母 = 忙しい 毎日) ⇒ (私の母は毎日忙しい。)
07. **They aren't from Japan.** (彼ら ≠ 日本出身の) ⇒ (彼らは日本出身ではありません。)

#### ② 存在を表す文

08. **He is in Tokyo.** (彼 いる 東京に) ⇒ (彼は東京にいる。)
09. **Our school is on the hill.** (私たちの学校 ある 丘の上に) ⇒ (私たちの学校は丘の上にある。)
10. **That book is on my desk.** (あの本 ある 私の机の上に) ⇒ (あの本は私の机の上にあります。)
11. **This is there.** (これは ある そこに) ⇒ (これはそこにあります。)
12. **Your pencil is here.** (あなたの鉛筆 ある ここに) ⇒ (あなたの鉛筆はここにあります。)
13. **My mother is at home every day.** (私の母 いる 家に 毎日) ⇒ (私の母は毎日家にいます。)
14. **They aren't in Japan.** (彼ら いない 日本に) ⇒ (彼らは日本にいません。)

## ■be 動詞を用いた「存在」を表す文

be 動詞には「イコール」と「存在」の2つの意味があることは上述したとおりです。ここでは「存在」を表す文についてさらに詳しく見ていきます。次の2文、**15. 16.** は両方とも「壁に一枚の写真が掛かっている（存在している）」ことを表しています。通例、**15.** は特別な状況の場合は別として、不自然な文であり、**16.**のような **there** で始まる文が自然な文であると言えます。ところが、**picture** に付いている不定冠詞を定冠詞にすると、今度は**17.**のような文が自然な文であり、**18.**のような文は普通、非文とされます。これは一体どういうことなのでしょう。

**15. ? A picture is on the wall.**

**16. There is a picture on the wall.**

**17. The picture is on the wall.**

**18. \* There is the picture on the wall.**

注) \* (アスタリスク) はその文が非文であることを示す。

上の疑問を説明するためには、「情報の伝達構造」についての説明をしなければなりません。言語の第一目的は情報の伝達であり、その最も基本的な単位は「文」という形をとりますが、私たちはできる限り情報を正しく相手に伝達するために、いくつもの文を連ねた形をとります。このいくつもの文が連なり、全体として1つのまとまりを持ったものを「談話」といいます。「談話」が有効的に、効率よく機能するためには、ある一つのテーマに沿って話すのがよいわけです。一つひとつの文がばらばらであれば「談話」として成り立ちません。そこで、話し手は話題の方向性を決定し、それに沿って話を進めていきます。聞き手にとっては、話題の範囲が限定されるので伝達内容が理解しやすくなるわけです。さらに、話し手は情報をより効率的に聞き手に伝達できるように、様々な工夫と配慮をします。例えば、聞き手の全く知らない事ばかりを並べたりはしないし、聞き手が知らないと思われることをいきなり話したりはしないものです。話し手は聞き手が知っているだろうと推測できること（これを旧情報と言います）から話し始め、聞き手の予備知識を確認しながら、新しい知識（これを新情報と言います）を追加しながら談話を構築していきます。もちろん、「旧情報」は文の主語や目的語などとして、いろいろな位置に表れる可能性はあるのですが、旧情報が好む位置というのがあります。談話の流れから考えれば、旧情報は直前の文にできるだけ近い場所、つまり、主語の位置に表れるのが最も自然であると言えます。**15.**の文が不自然に感じられるのは「旧情報」が示される文頭に「新情報」を表す不定冠詞の付く名詞がきているからです。それに対して**17.**の文が自然な文として受け入れられるのは「旧情報」が示される文頭にきちんと「旧情報」を表す定冠詞付の名詞がきているからです。これに対して、**16.**と**18.**で用いられている **there** 構文というものは、談話の中に話し手が聞き手に対して新情報を持ち出す構文です。それゆえ、**there** 構文の意味上の主語は新情報を表す不定冠詞の付いている名詞でなければなりません。ここで、**16.**と**18.**を比べてみると、**a picture** が主語である**16.**は正しい文と言えますが、**the picture** を主語としている**18.**は正しくない文ということになります。

## ■there 構文

前ページで、**there** 構文の **be** 動詞に続く名詞は新情報を表わす名詞でなければならないという趣旨のことを述べました。しかし、実際には定冠詞の **the** が付いている名詞が用いられる場合も多くあります。その理由の一つは使われている **there** が異なるからです。つまり、**there** には2種類の **there** があります。

### (1) 直示の **there** と存在の **there**

**there** には、直示を示す **there** と存在を示す **there** の2つがあります。直示の **there** は「そこに」という場所を意味する副詞であるのに対し、存在の **there** は何ら意味を持たない形式的な語であるといえます。

#### ① 直示の **there** 構文

直示の **there** 構文は、話し手が、**this** や **that** などの指示代名詞のように、発見物を指し示したり、相し手の注意を引くために用いたりする構文で用いられます。「ほら、あそこに・・・がいるよ。」「ほら、そこに・・・があるよ。」のように訳します。直示の **there** は [ðeə(r)] と発音され、強勢が置かれます。また、文頭の **there** の代わりに **here** が使われることもあります。

#### 19. **There's a girl at the gate.**

(ほら、門のところに女の子がいるよ。)

#### 20. **There's your sister at the gate.**

(ほら、門のところに君の妹がいるよ。)

#### 21. **Look! There's Mt. Fuji.**

(見て。あそこに富士山が見える。)

#### 22. **There goes the bell now!**

(ほら、ベルが鳴っている。)

#### 23. **There is the difficulty.**

(そこが難しいところだ。)

#### 24. **There's the door.**

(この部屋から出ていけ!)

#### 25. **There comes Tom.**

(あそこにトムがやって来る。)

#### 26. **There goes a bus.**

(ほら、バスが行くよ。)

#### 27. **Here comes a bus.**

(さあ、バスが来た。)

## ② 存在の there 構文

存在の there 構文は、話し手が、聞き手が知らない事柄、或は知っていたかもしれないが既に忘れてしまっていると思われる事柄を談話の中に持ち込む場面で用いられます。それゆえ、there is/are に続く名詞には旧情報を示す the や所有格などは付かないし、或は固有名詞などが続くこともありません。この構文の there は形式的な語であり、「そこ」「あそこ」を表す意味は持っていません。there はたいてい[ðə(r)]と発音され、強勢が置かれることもありません。

### 28. There's a girl at the gate.

(門のところに女の子がいるよ。)

### 29. There's a picture on the wall.

(壁に絵が一枚掛けてある。)

### 30. There's ice on the lake.

(湖に氷が張っている。)

### 31. Is there anything wrong with your car?

(あなたの車にはどこか具合が悪いところがありますか。)

### 32. There're some cats in that park.

(あの公園には猫が何匹かいる。)

### 33. There's another party this evening.

(今夕もう一つパーティがあります。)

### 34. There was a car blocking my way.

(私の行く手を塞いでいる車があった。)

#### Dr. Higgins's room

上の例文 28.~32.を見ればわかるように、存在の there 構文には基本的に場所を表す前置詞句（或は場所を表す副詞）が必要です。33.の例文では、this evening は空間的な場所ではありませんが、パーティの存在する時間軸上の場所を示しています。また、34.の例文には場所を表す前置詞句はありませんが、a car の修飾語句である後続する blocking my way（私の行く手を塞ぐ）によって、結果的に a car の位置を示すことになっています。

(2) there 構文の主語

① 文法上の主語

there 構文の文法上の主語は **there** であると言えます。there 構文の文法上の主語が there であることは次のような事象からわかります。

**35. There is a bookstore near here.** [肯定文では be 動詞が there の後にある]

(この近くに本屋がある。)

**36. Is there a bookstore near here? Yes, there is.** [疑問文では be 動詞が there の前にある]

(この近くには本屋はありますか。—はい、あります。)

**37. There isn't a bookstore near here.** [否定文では be 動詞+not が there の後にある]

(この近くには本屋はありません。)

**38. There is a bookstore near here, isn't there?** [付加疑問形を作る時に there を使う]

(この近くには本屋はありますよね。)

**39. There must be a better way.** [助動詞は there の直後にくる]

(もっと良い方法があるに違いない。)

Dr. Higgins's room

there 構文の文法上の主語が there であることは以下のことにも現れています。

(a) I don't want **there** to be any more trouble. (to 不定詞の意味上の主語の位置を占める。)

(b) I can't imagine **there** being a lake around here. (動名詞の意味上の主語の位置を占める。)

(c) **There** being no bus service, we had to walk. (分詞構文の主語として現れる。)

② 意味上の主語

there 構文の意味上の主語は be 動詞の後に続く名詞です。there 構文の意味上の主語が be 動詞の後に続く名詞であることは次のような事象からわかります。

**40. There is a dog in that park.** [be 動詞は単数の a dog に一致する]

(あの公園には一匹犬がいます。)

**41. There are some dogs in that park.** [be 動詞は複数の some dogs に一致する]

(あの公園には何匹か犬がいます。)

存在の there 構文で、there is/are に続く名詞 (=意味上の主語) については、学校文法では、「特定されない名詞でなければならない」と教えられます。具体的に言えば、a book, books, some books などは用いて良いが、the book, that book, his book, the books, those books, his books などは用いることはできません。このことを少し専門的に表現すると「定性を持つ名詞は用いられない」ということになります。定性を持つ名詞とは次のようなものです。

42. \* **There's the girl at the gate.** (定冠詞を伴う名詞)  
(門のところにその女の子がいるよ。)
43. \* **There's that picture on the wall.** (指示代名詞を伴う名詞)  
(壁にあの絵が掛けてある。)
44. \* **There're John's cats on the sofa.** (所有形を伴う名詞)  
(ソファーにジョンの猫がいる。)
45. \* **There's John in the room.** (固有名詞)  
(部屋にジョンがいる。)
46. \* **There's him in the room.** (代名詞)  
(部屋に彼がいる。)
- 注) \* (アスタリスク) はその文が非文であることを示す。

ところが、ある条件の下では「the+名詞」、「所有格+名詞」、「代名詞」「固有名詞」などの形が存在の there 構文の意味上の主語として用いられることがあります。上述したように、存在の there 構文の働きは、話し手が、聞き手が知らない事柄、或は知っていたかもしれないが既に忘れてしまっていると思われる事柄(=新情報)を談話の中に持ち込むものです。例えば、47.の例文で、話し手 B が、“a leftover roast beef”ではなく、“the leftover roast beef” というように定冠詞の the を付けているのは、ローストビーフと言えば何のことを言っているのか A が了解するだろうと B が思っているからです。ところが、話し手 A は「何か食べるものある？」と尋ねていることから推測できるように、昨日のローストビーフはすっかり忘れてしまっているか、残っていてまだ食べられるということに気づいていません。そこで、話し手 B は there 構文を用いて、聞き手(話し手 A)に対して、忘れていた情報を思い出させているわけです。つまり、聞き手(話し手 A)にとって、この情報(昨夜のローストビーフが残っていて食べられる状態にあること)は文脈から予測できない情報を表しており、「the+名詞」の形なのですが、新情報となるために、存在を表す there 構文として適格な文となります。同様のことが 48.や 49.の例文でも言えます。

47. **A: Is there anything to eat?**

(何か食べるものある?)

**B: Well, there's the leftover roast beef from yesterday.**

(ええと、昨日の残りのローストビーフがあるよ。)

48. **A: Who could I ask?**

(誰に尋ねられるだろうか。)

**B: Well, there's your uncle.**

(そうだね。君の伯父さんがいるじゃないか。)

49. **A: I don't have any friends.**

(僕には友達が一人もいない。)

**B: Oh, don't be silly. There's John and me and Susan.**

(バカ言え! ジョンも僕もスーザンもいるじゃないか。)

Dr. Higgins's room

49.のBのような文をリスト文と言います。Rando and Napoli(1978)によると、there 構文は物の存在を提示する「存在文」とものを列挙する「リスト文」とに分けられるという。リスト文では、個々の項目は既知であっても、どんな項目がリストに入るかは聞き手にとって分かりません。つまり、文脈から予測できない情報であるために、定冠詞の付いた主語であるけれども there 構文で用いられるということです。また、複数の名詞が主語になっているにも関わらず、be 動詞は is/was と単数扱いになっているのも特徴的です。

A: Who was at the party?

(パーティには誰が来ていたの?)

B: Well, let's see... there was Mary, and Mrs. Smith, and John.

(えーと、マリーとスミスさんと、ジョンだよ。)

A: What's worth visiting here?

(ここで訪れる価値のあるところは?)

B: There's the park, a very nice restaurant, and the library.

(その公園があるでしょう。それに良いレストランがあるし、図書館があります。)

存在の there 構文の意味上の主語に定性の名詞が用いられる事例のもうひとつは、後続する修飾部分の影響を受けて、意味上の主語が「定冠詞+名詞」という形になる場合をあげることができます。

50. **There's the possibility that John will come in time.**

(ジョンが間に合うように来る可能性はある。)

51. **In Japan there was never the problem that there was in France.**

(日本ではフランスで起こったような問題は起こらなかった。)

52. **There's the strangest cactus in that botanical garden.**

(あの植物園にはとても珍しいサボテンがあるのだよ。)

53. **There was the sound of a huge roar.**

(物凄い歓声が聞こえた。)

## Dr. Higgins's room

Suzuki (1978) の説明を主に引用参照しながら、50.~53.の「主語の定性」問題について補足説明をしていきます。

### 50.について

the possibility に後続する that John will come in time は the possibility の同格節です。ここで、「同格節を伴う名詞は、定冠詞以外の冠詞、つまり不定冠詞とかゼロ冠詞を普通はとらない」（但し、同格節を伴う名詞に一定の前置修飾語がつくと不定冠詞をとることができます）というルールがあります。つまり、この possibility に付いている定冠詞は文法上のルールに従って付いているのであって、聞き手にとっての旧情報を表している印ではありません。そういうわけで、存在の there 構文の主語として用いることができるわけです。

### 51.について

(a) \* There was never the problem in Japan.

(b) There was never a problem in Japan.

(c) In Japan there was never the problem that there was in France. (51.の再掲)

上の例文(a)は非文であるので、(c)の文の the problem は本質的には(b)の文の a problem と同じであると考えられる。しかし、後続する that there was in France によって限定化を受けて定冠詞がついたものと考えられる。つまり、この場合も problem に付いている定冠詞は聞き手にとっての旧情報を表す印ではないということです。それ故、存在の there 構文の主語として用いることができているのです。（しかしながら、関係詞節で修飾されれば名詞には必ず定冠詞がつくとは限りません。このことはここでは詳しく扱いません。）

### 52.について

最上級の形容詞で修飾される名詞には the が付きます。これは最上級で修飾されることによって、その名詞が特定化され、限定されるからです。しかし、この定冠詞は文法上のルールに従って付いているのであって、聞き手にとっての旧情報を表している印ではありません。そういうわけで、存在の there 構文の主語として用いることができるわけです。

### 53.について

例えば、「沖縄のガラス」を、英語で前置詞を用いて表記すると、次のようなものが考えられます。

(a) the glass from Okinawa

(b) glass from Okinawa

(c) the glass of Okinawa

(d) \* glass of Okinawa

of - 前置詞句で後置修飾される名詞は、from などを用いる前置詞句で後置修飾される場合とは異なり、普通、修飾される名詞は定冠詞をとるということです。（尤も、of - 前置詞句を伴う名詞句がすべて定冠詞をとるわけではありませんが、定冠詞以外のものをとることが出来ない場合があるということです。）というわけで、この sound に付いている定冠詞も上のような事情で付いているのであって、聞き手にとって旧情報を表す印ではないということです。その結果、存在の there 構文の意味上の主語として適格ということになります。

### (3) there 構文の動詞

there 構文で用いられる動詞は、一般的には「存在」を表す be 動詞ですが、文学作品などでは be 動詞以外に「存在」「出現」「生起」を表す自動詞と共に用いることもよくあります。

#### ① 出現動詞

54. **There once lived in a little English town, a linen weaver.** (存在)  
(昔、イギリスのとある小さな町に一人の麻布織り職人が住んでいました。)
55. **There appeared a man in front of us.** (出現)  
(私たちの前に一人の男が現れた。)
56. **There began a riot.** (生起)  
(暴動が始まった。)
57. **There came a knocking at the door.** (生起)  
(ドアを叩く音が聞こえた。)
58. **There followed a long silence.** (存在)  
(長い沈黙が後に続いた。)
59. **There exists a problem in this regard.** (存在)  
(この点に関して問題があります。)
60. **There arose a great cry from the crowd.** (生起)  
(群衆から大きな声が上がった。)
61. **There rose a large carp from the pond.** (生起)  
(池から巨大な鯉が姿を現わした。)
62. **There stands a hill in the north of our village.** (存在)  
(私たちの村の北側に丘があります。)
63. **There occurred an accident at that corner last night.** (生起)  
(昨夜あの角で事故が起こった。)
64. **There seemed to be no one there.**  
(そこには誰もいないように思われた。)
65. **There took place a strange accident.** (生起)  
(不思議な事件が起きました。)
66. **There resides in this house an old woman.** (存在)  
(この家には一人の老婦人が住んでいる。)
67. **There remains much work to do.** (存在)  
(すべき仕事がたくさん残っている。)

② 出現動詞を作る（自動詞から）

本来、「出現」の意味を持たず単なる「運動」を表す動詞も方向の前置詞句と結合することによって「出現動詞」として認識されます。すると、これらの動詞も there 構文に用いることができます。

68. \*There **walked** a policeman.

69. ??There **walked** a policeman **into my office**.

70. There **walked into my office** a policeman.

71. **Into my office** there **walked** a policeman.

(事務所に一人の警官が歩いて入ってきた。)

72. \*There **ran** a large deer.

73. ??There **ran** a large deer **out of the bushes**.

74. There **ran out of the bushes** a large deer.

75. **Out of the bushes** there **ran** a large deer.

(茂みの中から大きな鹿が走って出て来た。)

76. \*There **swam** a dog.

77. ??There **swam** a dog **towards us on the beach**.

78. There **swam towards us on the beach** a dog.

79. **Toward us on the beach** there **swam** a dog.

(砂浜にいる私たちの方に向かって一匹の犬が泳いで来た。)

68.の例文が非文である理由は運動の方向が示されていないからですが、運動の方向が示されている 69.の例文でもこのままでは there 構文として不適合です。それは walk と into my office が離れていて「出現動詞」としては認識されにくいからです。walk は単なる「運動」を表す動詞であり、「歩いた」という意味くらいにしかありません。ところが、70.のように、walk into my office と連続すると、「私の事務所の中へ歩いて入って来た」というように話し手の視野の中に a policeman が現れたという意味に感じ取られ、「出現動詞」として認識されるわけです。また、文頭に方向を示す前置詞句を置いても、walk が出た時点で、walk into と結びつき、「私の事務所の中へ、歩いて入って来た」というように、話し手の視野の中に現れたと認識されるので容認可能な英文となります。つまり、意味上の主語（ここでは a policeman）が提示される時点で、主語の「出現」の場面設定が行われていれば、単なる「運動」を表す動詞も「出現動詞」となり得るということです。72.~75.や 76.~79.の例文についても同じように説明できます。

Dr. Higgins's room

Aissen(1975)は、there 構文に生じる動詞を、動作動詞と状態動詞で分け、動作動詞が there 構文に用いられるときにはいくつか制限あるとして、(i) 動詞は単純過去形であること、(ii) 助動詞は生じないこと、(iii) 方向を表す副詞句は意味上の主語の前に置かれること、などの3点を挙げている。

③ 出現動詞を作る（他動詞から）

他動詞も場所の目的語をとったり、受け身形にしたりすることによって、「出現動詞」になれる。この場合も there 構文に用いることができます。

80. \*There **ate** dinner an old man.

81. \*There **met** me an old man.

82. \*There **entered** a nice breeze.

83. There **entered our classroom** a nice breeze.

(いい風が私たちの教室の中に入って来た。)

84. \*There **reached** the sound of voices and laughter.

85. There **reached my ear** the sound of voices and laughter.

(喋り声や笑い声が私の耳に入ってきた。)

86. \*There **crossed** a most horrible thought.

87. There **crossed his mind** a most horrible thought.

(彼の心にとっても恐ろしい考えがよぎった。)

88. There **are placed** a lot of foodstuffs on the table.

(テーブルの上にたくさんの食材が置かれています。)

89. There **was born** a baby to them.

(彼らに赤ちゃんが生まれた。)

90. \*There **was hit** a boy on the cheek.

(少年は頬を殴られた。)

80. 81.の例文のように、他動詞は通例 there 構文には用いられません。なぜなら、他動詞と目的語の関係をみると、80.の例文では“ate dinner” (=夕食を食べた) 81.の例文では“met me” (=私に会った) となり、これらは単なる行為を表しているのに過ぎないからです。これに対して、83. 85. 87.のような他動詞では、場所を表す語句が目的語になることによって、“entered our classroom” (=私達の教室に入って来た)、“reached my ear” (=私の耳に入って来た)、“crossed his mind” (彼の頭に思い浮かんだ) というように「出現動詞」として認識されるようになります。また、例文 88.89.のように受け身形になることによって、「存在」や「出現」を表し、there 構文として適格になる他動詞もあります。例文 90.は単なる行為を表しているに過ぎないので there 構文としては適格ではありません。

④ 消滅や非出現を表す動詞

There 構文に用いられる動詞は、通例「存在」「出現」を表す動詞であって、その正反対である「消滅」・「非出現」などを表す動詞は用いられることはないと説明される。しかし、Kuno and Takami (2013) はこれらの「消滅」・「非出現」を表す動詞も場面が整えられれば容認されるという。

91. \*There **disappeared** three ships last week.

(先週 3 艘の船が消えた。)

92. Into the woods there **disappeared** a young moose, before we could get a picture of it.

(私たちが写真を撮る前に、子どものアメリカヘラジカが森の中へ消えて行った。)

93. \*There **didn't emerge** any new fact while we were working on the project.

(その計画に従事している間にはなんら新しい事実は現れなかった。)

94. For the first time since the beginning of the war, there **didn't emerge** any fighter squadrons from the airbases in the desert.

(戦争が始まって以来初めて、砂漠の空軍基地から戦闘飛行隊が一つも現れなかった。)

Kuno and Takami (2013) の説明は大体次のようなものである。先ず、disappear (消える) について、91. と 92. の 2 文を比較して、「91. では意味上の主語 (three ships) の左側の部分が there disappeared のみのために、主語指示物の消滅が、話し手がいる場所からの消滅かどうか分からないし、話し手がその消滅をどこでどのように観察しているのか不明であるのに対し、92. では意味上の主語 (a young moose) の左側の部分に “Into the woods there disappeared” というように、方向を表す副詞句と動詞部分があるために、主語指示物の消滅が、話し手が観察している森の中への消滅であることがわかり、さらに、後続する before we could get a picture of it によって補強されている」と説明している。また、didn't emerge (現れなかった) については、93. と 94. の 2 文を比較して、「93. では主語指示物の出現が単に否定されているのに過ぎないが、94. では文脈から、主語指示物の出現が話し手によって予期されていたという状況がまずあり、その予期に反して主語指示物が現れなかったということが述べられている。つまり、話し手が、設定された場面を観察し、その場面に予期していた主語指示物が出現しなかったことを観察している」と説明している。これら二つの説明から次のように考えられる。「消滅」を表す動詞であっても「非出現」を表す動詞であっても、話し手 (または話し手が自分の視点を置いている登場人物) によって、ある設定された場面において、観察可能な消滅であり、非出現であれば、そのような「消滅」や「非出現」を表す動詞も there 構文で認められるということです。

(4) there 構文を用いた表現 (慣用句、諺、名言など)

**95. There's always a next time.**

(いつも次回というものはある。) ⇒ (次、頑張ろう。) 《失敗した人を慰める言葉》

**96. There's always a first time.**

(いつも最初というものはある。) ⇒ (失敗を恐れずやってみなさい。) 《初めての試みを励ます言葉》

**97. There's the door.**

(ドアがありますよ。) ⇒ (この部屋から出ていけ!)

**98. There's no doubt about it.**

(それについては全く疑う余地がない。)

**99. There's no way.**

(絶対だめです。)

**100. There's a phone call for you.**

(あなたに電話です。)

**101. There's someone on the phone for you.**

(誰かからあなたに電話です。)

**102. There's nobody here by that name.**

(こちらにはそういう名前の者はおりません。)

**103. There's something wrong with my car.**

(私の車はどこか具合が悪い。)

**104. Is there something wrong with me?**

(私のどこがいけないの?)

**105. There's nothing like a cold shower in the morning.**

(朝の冷たいシャワーほど良いものはない。)

**106. There is nothing like a dream to create the future.** 《Victor Hugo のことば》

(夢、これ以外に未来を作り出すものはない。)

**107. There is no accounting for tastes.**

(人の好みは様々だね。)

**108. There is no royal road to learning.**

(学問に王道なし。)

**109. Where there's a will, there's a way.**

(志あるところに道あり。)

**110. There are plenty of other fish in the sea.**

(大海には沢山の魚がいます。) ⇒ (他にもいい人は一杯いるじゃない。) 《失恋した人を慰める言葉》

**111. There seems to be little hope of his recovery.**

(彼が回復する望みはほとんどないようだ。)

**112. There's no doubt that John is a good boy.**

(ジョンがいい子であるのは間違いない。)

**113. There's no way John can win.**

(ジョンが勝つなんてあり得ない。)

## <<< 参考図書 >>>

- 『英語教師の文法研究』安藤貞雄著 (1984年再版発行 大修館書店)
- 『徹底例解ロイヤル英文法』綿貫陽 宮川幸久 マーク・ピーターセン 他共著 (2002年発行 旺文社)
- 『表現のための 実践ロイヤル英文法』綿貫陽 マーク・ピーターセン共著 (2006年発行 旺文社)
- 『英文法解説』江川泰一郎著 (1964年改訂新版発行 金子書房)
- 『英文法解説』江川泰一郎著 (1991年改訂第3版発行 金子書房)
- 『英文法総覧』安井稔著 (1996年改訂版発行 開拓社)
- 『第3版オックスフォード<sup>®</sup> 実例現代英語用法辞典』Michael Swan 著 吉田正治訳 (2007年発行 研究社/オックスフォード<sup>®</sup> 大学出版局)
- A Practical English Grammar*, Thomson, A.J. and A.V. Martinet (1986<sup>4</sup>, Oxford University Press)
- 『第4版 実例英文法』AJ トムソン/AV マーティネット著 江川泰一郎訳注 (1988年発行 オックスフォード<sup>®</sup> 大学出版局)
- Meaning and Form*, Bolinger, D. (1977, Longman Group Ltd)
- 『意味と形』Bolinger, D. 著 中右実訳 (1981年発行 こびあん書房)
- 『機能英文法』村田勇三郎著 (1999年10月発行 大修館書店)
- 『新しい聞き手の文法』安井稔著 (1978年初版発行 大修館書店)
- 『英語学の世界』安井稔著 (1977年再版発行 大修館書店)
- 『意味と言語構造』Chafe, W. 著 青木晴夫訳 (1974年発行 大修館書店)
- 『談話の構造』〈新英文法選書第10巻〉福地肇著 (1998年9月発行 大修館書店)
- 『学校文法の語らなかつた英語構文』〈中京大学文化科学叢書11〉足立公也・都築雅子著 (2010年発行 中京大学文化科学研究所)
- 『[例解] 現代英文法事典』安井稔編 (1988年三版発行 大修館書店)
- 『日英語の自動詞研究』高見健一・久野暲著 (2002年発行 研究社)
- 『謎解きの英文法 省略と倒置』久野暲・高見健一著 (2013年発行 くろしお出版)
- 『謎解きの英文法 冠詞と名詞』久野暲・高見健一著 (2004年発行 くろしお出版)
- 『英語の〈仕組み〉の探り方』磯野達也・坂本浩著 (2011年発行 ぱる出版)
- 『英語の文型』〈開拓社言語・文化選書5〉安藤貞雄著 (2008年発行 開拓社)
- Woman, Fire, and Dangerous Things*, Lakoff, G. (1987, University of Chicago Press)
- 『認知意味論』Lakoff, G. 著 池上嘉彦・河上誓作 他訳 (1993年発行 紀伊国屋書店)
- Presentational-There Insertion: A Cyclic Root Transformation*, Aissen, J. (1975, *CLS* 11, pp.1-14)
- 『存在文の意味上の主語と定性・不定性』鈴木英一著 (1974年 山形大学紀要〈人文科学〉第8巻第4号, pp.517-543)
- 『ウイズダム英和辞典 第3版』井上永幸 赤野一郎編 (2013年発行 三省堂)